

茶の湯文化学会会報 No.74

第74号 / 2012年10月22日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp



講演中の中谷美風氏

平成二十四年六月十七日の茶の湯文化学会大会において中谷美風氏の講演を拝聴する機会をえました。平成遷都一三〇〇年祭記念事業の一環としておこなわれた、平成二十二年の「天平茶会」については、すでに会報六十七号で報告したとおりです。中谷氏は、その後「茶経」に記された陸羽の茶を復元する努力を一つづつ紹介いただきました。その経験の一端を豊富な画像資料とともにご紹介いただきました。

「茶経」の復元―陸羽の茶を感じる―について
廣田吉崇

煎茶美風流の家元でもある中谷氏は、みずから茶人であるが研究者ではないと謙遜されます。しかし、「茶経」の記述に基づいて喫茶法を復元するためには、記述されていないこともふくめ、すべての事柄に全体として整合する一応の答えを出さなければなりません。たとえば、摘み採った茶葉は一分十五秒蒸す。搗き固めて乾燥させた餅茶はひとつ五グラムである。それを茶碾にかけると、堅くて粉末にできない軸の部分をつぶる。これを四グラムの粉末ができる。これが五人分、一人あたり〇・八グラムとなる。結論だけ聞くと簡単なことのように思えますが、納得できる状態にいたるまで復元することの労苦は、想像をこえるものでしょう。

講演では、「茶経」の「二之具」、「三之造」、「四之器」、「五之煮」のいくつかの記述について、復元過程でえられた経験から解釈をのべられました。興味深い点をいくつか紹介します。
「二之具」において、餅茶を作る「規」という型のこと記されています。実際には木製で復元されていますが、「茶経」に鉄製とあることは、餅茶を作るためには力を入れてたつき固める必要があるためと説明

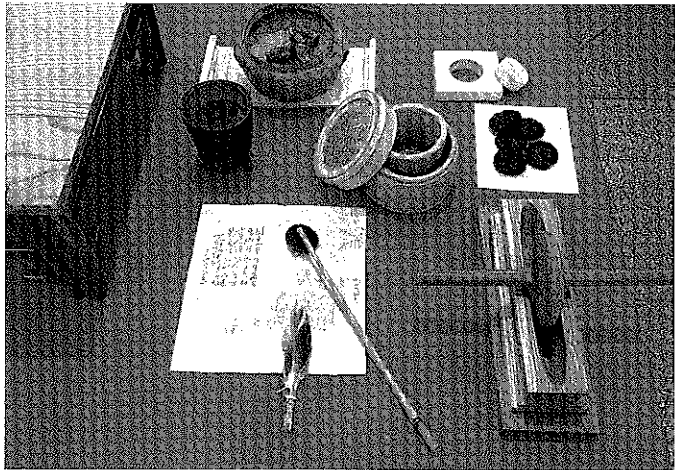
されました。

「三之造」において、茶を採る日は、晴れていても雲があれば採らないと記されています。茶を採ってから、蒸し、杵と臼で搗き、型に入れてたたき固め、焙り、穴をあけ、餅茶を乾燥させるまでを一日のうちに終えなければなりません。そのために晴天を選んて作業をしたものと考えられます。そして、餅茶の形状に関して、たとえば胡人の靴のように



再現された諸道具

小皺がよっているとか、こぶ牛の胸のようにとか、浮雲が山から出たようにとか、新たに開墾した土地がにわかの大雨にあったようにとか、『茶経』にみられる文学的な表現に対し、餅茶にそのような形状がみられることを実例により示されました。ただし、茶摘みや餅茶を作る段階の記述は淡々としたものであり、おそらく陸羽は作業に関与していないのであろうと印象を語られました。



餅茶、碾ほか

「四之器」において、くわしくのべられたのは「碾」についてです。これは薬研に似たものですが、鋭角的な薬研に対して、茶碾は回転する円盤の周囲がなめらかな曲線であり、餅茶を押しつぶして粉末化する機能的な道具であると指摘されました。また、中国の法門寺から出土した銀製茶碾について、五グラムの餅茶を粉末化するには十分な大きさであり、実用に供されたものと強調されました。



喫茶風景

そして、「羅合」によって餅茶にふくまれる茶の軸の部分のぞかれます。

「五之煮」において、釜でわかした湯に茶の粉末をいれ、泡が浮かぶように「茶の華」を育てて、茶を飲みます。

さいごに中谷氏は、『茶経』が喫茶法を詳細に記した技術の書であり、そこには喫茶文化の精神についてふれていないが、それを補うものが廬全の詩「走筆謝孟諫議寄新茶」であり、それらが一体として陸羽の茶を伝えて



見学風景

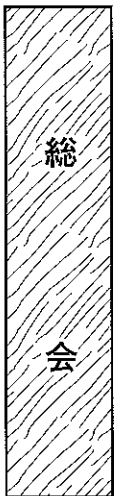
中谷氏の講演のあとには、美風流の社中の皆様により、復元された『茶経』の茶を実際に飲んでみるという貴重な体験をすることができました。社中の皆様は、茶摘みの段階から『茶経』の茶の復元作業に関与されているとのことでした。こうした背景があり、おいしいお茶を召し上がっていただきたいという思いでご奉仕してくださったものと納得いたしました。

ただ、あえて率直な印象を申しのべますことをお許しいただけるならば、火気厳禁という会場の制約のために、最善の努力にもかかわらず、カフェインを強く感じるインパクトのある味が十分実現できていないように思えたことも正直なところです。このことは、社中の皆様の方がより切実にお感じになったかもしれません。

陸羽がなぜ手間暇のかかる方法で茶を飲んでいたのか、その理由は茶の味にあるのではないかと考えます。みずから餅茶を炭火で焙り、茶碾で粉末化し、慎重に湯加減を調節しながら、茶の華を育てて、三碗を楽しむという、まさに陸羽がしたであろう手順で茶を飲んでみるならば、よりいっそう「陸羽の茶を感じる」ことができるのではないのでしょうか。

(参考) 煎茶美風流のホームページ

<http://bifuryuu.com/index.html>



平成二十四年度総会は、六月十七日(日)の午後一時から、大会の研究発表会場と同じ池坊短期大学「こころホール」で行なわれた。総会は、会に先だつて選ばれた神谷理事の司会で議事が進められ、最初に平成二十三年度学会活動についての報告が行なわれた。このうち、事業報告については影山副会長により行なわれ、理事会、大会、研究会、例会、会報、学会誌それぞれについての活動実績が報告された。また決算報告については谷端副会長によって行なわれ、今期余剰金が九十四万余円で、これが従前の繰越金に加えられる旨の報告がなされた。またこれを適正とする監査報告が神谷理事により代読され、これらの議題については全会一致で承認された。

次に平成二十四年度の事業案と予算案が提案された。事業案は影山副会長により説明が

なされ、昨年度までと異なる点としては、国内での研究会が廃止され、研究会は年一回の海外開催とするというものである。地方での活動を活発にするという主旨を伴った研究会であったが、近年、例会活動が盛んになり、当初の目的をある程度達成したからということであった。また予算案については谷端副会長から、研究会が一回になること、事務局を二人体制とすること等に対応して組まれた予算案である旨の説明があった。この事業案、予算案についても、全会一致で了承された。これらを以って、総会は午後一時三十分を終了した。

大会

平成二十四年度大会は、六月十六日と十七日の二日間にわたって京都で開催され、第一日目に見学会、第二日目に研究発表と講演が行われた。両日ともに盛会であった。

第一日目の見学会は、北村美術館内の「四君子苑」と「頼山陽書齋山紫水明處」の二ヶ所であった。いずれも京都市上京区にあり、

用、茶室の設計原理を武道の観点から見つめた。

武士は左腰に帯刀していたので、他者と対面した位置で右足を前に進めることは、抜刀の可能性を示唆する。したがって、徳川時代の前半までは、左足を先行させることが規範になっていたものと考えることができると。

茶事はしばしば急襲の場となる可能性があった。そのようなときの客側の対処法のなかで、武器としての扇子の使用法について例を実演した。また、「正座」という姿勢の護身上的動きも実例を示した。

さらに、扇子の道具としての寸法の合理性につき、より典型的な道具・護身具との類似性を指摘した。それらの論点に基づき、客の座る位置、茶事のそれぞれの時期に扇子の仮置き場所が異なる意味について、護身武道の観点から、論じた。そして、扇子の隠れた機能について論考した。

さらに、客の護身の観点から、広間、小間（小間出炬、小間向炬、小間隅炬）のメリット、デメリットについて論考し、客に精神的な安寧を提供する場所としての茶室の役割との関連を論じた。

見学の様子については、前号で桐浴邦夫氏と船坂富美子氏が報告されているので、こちらを参照されたい。雨天にもかかわらず、一六四名の方が参加され、雨中での待ち時間に折れることなく、熱心に見学されていた。

また第二日目は、一五六名の参加を得て池坊短期大学「こころホール」で行なわれた。午前十時半からの谷晃会長の挨拶ののち、午前中には中村修也氏の司会で三題の研究発表が行なわれ、一題目は王静氏の「台湾における茶芸の創出」、二題目は桐山秀穂氏の「野村美術館所蔵の茶臼について―茶臼の新出資料の紹介とその編年的位置付け―」、三題目は砂川佳子氏の「表千家九代了々斎の茶の湯―文化・文政期の茶会を中心に―」であった。また昼食と総会を挟んでの午後の部の研究発表は、竹内順一氏の司会によって進められ、四題目として木島蓉子氏の「松屋の記録に見る連歌様相」、五題目として谷晃氏の「茶書に見る〈さび〉」の発表があった。そのあと中谷美風氏による講演「『茶経』の復元―陸羽の茶を感じる―」があり、その講演内容に基づいて復元されたお茶が同氏によって振る舞われた。

研究発表の内容については学会誌「茶の湯

「錫縁香合の形状と蒔絵について」

竹内奈美子

「錫縁香合」の名称は、香合の蓋と身の縁に錫製の縁取りが廻らされていることに由来している。また錫縁香合は、当初から香合として制作されたものではなく、中世に白粉などを入れる、化粧道具の小箱として作られた。通常は化粧道具などの身の回りの細々とした道具類を一括して収める箱、手箱の内容品の一部として制作され、木製漆塗で、主に蒔絵の技法で装飾されている。この中世の手箱および内容品の一具から離れた蒔絵の小箱を、近世に入って茶人が香合に見立てて使うようになり、それが後に錫縁香合とよばれるようになった。

ただし、中世より伝世した作例の数は限られ、近世において既にその需要は伝存例の数を上回っていたと考えられる。すなわち、現在まで伝わったいわゆる時代物の錫縁香合の中には、しばしば江戸時代以降に中世手箱の内容品を模して制作されたと目される例が見受けられる。発表者は、こうした模古作と中世手箱の内容品とを線引きする際の指標とできるような画像および計測データの取得を目的として、現存する手箱内容品の各面撮影・

文化学」で詳報が掲載される予定であるし、また講演の内容については、本号巻頭文に掲げられているので、それらを参照していただきたい。

例会

東京例会

(平成二十四年四月十四日)

「武道と茶道」

岡本浩一

茶道文化の担い手は武士が中心であったので、武道の所作や制約が茶道の規矩に影響を与えている可能性が考えられる。玄武館武道は、徳川時代の武士の日常生活の武道的要素を現代に伝える武道であり、立位からの乱取り、座位(正座)からの乱取り、丸腰・座位で、抜刀した立位の相手に対する対処など、室内をも前提とした多彩な武術を備えている。

講師は、茶道と玄武館武道の双方を学んだ者である。

講演では、左腰帯刀・帛紗右腰を規矩とする茶道をとくに念頭に、茶室の所作や扇の使

形状計測を基礎調査とし、併せて蒔絵の文様、技法に関する考察を行った。その結果、手箱内容品の蒔絵の文様構成には一種の法則性がみられ、さらにその形状の大凡の時代的変遷を抽出することができた。

(平成二十四年五月十二日)

「中国喫茶文化と日本の文人―

「宜興茶壺」受容の過程―

古川紗弥香

発表では、日本の文人が、どのように中国の文人たちの文化を受容したのか、を探る手がかりの一つとして、宜興窯の茶壺を江戸時代の文人たちが受け入れる過程を追った。江戸時代を通じて、中国の文化を熱心に吸収しようとした日本の文人たちが直面したのは、道具と情報の不足の中で、いかにそれを体現するかという問題であった。鎖国化にあった日本で、文人の生活文化を伝える拠点となったのは、長崎と宇治の万福寺である。書物という、もうひとつの強力な情報源もあり、日本でも中国の文人文化に傾倒する人々が増えていく。

しかし、十八世紀後半の喫茶方法と、断片的な宜興理解は、文人と陶工の協力の結果と

して宜興茶壺とは形状の異なる「急尾焼（急焼）」とよばれる茶器の使用を促した。その状況に変化をもたらしたのは、青製煎茶の製法の発明と淹茶法である。文化文政期を迎えると、それらの普及に加え、中国に関する文字情報と実物の増加によって、文人文化に対するイメージと知識は格段に膨らんでおり、十九世紀半ばの宜興茶壺の浸透へとつながっていた。

して拝見し、存星の名を冠して呼んだ点で重要な意味を持つ。「存星盆」を実見した人々の間では同作を介して存星についての共通認識が成立していたと言えるためである。「存星盆」は現在所在不明であるが、その特徴を『茶道四祖伝書』等の記述から纏めると、地を布目のように彫出し、一部に沈金を併用した彫彩漆の一種と考えられる。この類の漆器は現存作例も少なく、日本に舶載された数も多くはなかった。分類名称として定着するには類例が少なすぎたことが、定義される範囲の幅広さ、曖昧さに繋がっているのではないだろうか。

た。院政時代の茶は、文章道・明経道といった漢詩文の世界で続いていた詩歌の会で飲まれる茶湯があり、少内記中原広俊の漢詩には亡くなった友人の旧宅に荒れはてた茶園・薬園があつたと記すものがある。地下文人が、屋敷で自家用の茶を栽培していた記録である。

「松屋三名物「存星盆」と「存星」の問題」

福島 修

存星とは、填漆あるいは漆絵に線刻あるいは沈金を併用するものを一般に呼ぶが、彫彩漆の類や魚々地のものを含める場合もあり、総じて概念の境界は曖昧とされる。本発表では、中世より使われ続けていながら実態の不明確な「存星」という語について、奈良の塗師屋・松屋に伝わる三名物の一つ「存星盆」を糸口として考察し、問題点を確認した。

松屋がいつ三名物を所有するようになったのかは明らかでないが、「存星盆」は幕末に至るまで最も有名な「存星」として、つまり一種の基準として機能したはずである。その影響範囲など問題点が残るものの、定義の変遷を跡付ける上で考察の起点として機能するものと言えるだろう。

室町時代以降に見られる「存星」についての記録のうち、松屋三名物「存星盆」に関する記録は同作を主要な茶人たちが「名物」と

（平成二十四年七月十四日）
「鎌倉時代の茶の生産・流通・消費」

報告は、前段階としての院政時代から始め

鎌倉時代の茶の生産と消費に関わる史料群は、鎌倉に進出した西大寺流律院に残される。

寺領や系列寺院からの生産に関する報告や贈答儀礼の中に埋め込まれた流通の状況、縁者を通じて茶園が関東に広まっていく様子がわかる。

「中世静岡の喫茶文化」 橋本素子氏
東海例会（会場：名古屋文化短期大学）
アセンブリホール 午後二時〜
十一月二十四日（土）

高知例会（会場：高知県立文学館慶雲庵茶室）
十二月九日（日） 午前十時〜
「茶の湯関係文献を読み所感の発表」
茶事 席主未定（十二時〜十六時）
二月十日（日） 発表者未定

例会の二案内

東京例会

十一月十七日（土）（会場：国士舘大学世田谷校舎 午後二時〜）
「天下二宗四郎について」 鈴木裕子氏
「中国の酥乳茶文化（仮）」 祁 玫氏
一月十九日（土）（会場：東洋英和女学院大学 六本木校舎 午後二時〜）
「西洋人の見た茶の湯」（仮） 谷村玲子氏
「南蛮文化と茶の湯」（仮） 宇野千代子氏

近畿例会
十一月十七日（土）（会場：茶道資料館 午後二時〜）
「茶会記に見る酒井宗雅の茶」 橘 倫子氏
「酒井宗雅の茶」 影山純夫氏
※参加費 六〇〇円（会員・非会員とも）

「石州流三百ヶ条不白答（中）常用文」 柏井 武氏

北陸例会

三月二十三日（土）（会場：未定）
内容未定

金沢例会

十一月二十五日（日）（会場：金沢市歌劇座）
集会室 十時〜十二時三十分
「未定（仙叟宗室と金沢について）」 熊倉功夫氏
「未定」 未定

一般の方々が茶の湯に親しんでもらうための茶席を設ける。
会場 高知県立文学館慶雲庵茶室
時間 十時から十六時まで
開催予定日 高知新聞伝言板に掲示
（会費三百円）



お知らせ

*年会費を未納の方は、同封しました払い込み用紙にて至急お払い込みくださいますようお願いいたします。
 *本号の発行時期が、編集担当者の不手際により遅れましたことを、深くお詫び申し上げます。



東海例会々場(名古屋文化短期大学)

アセンブリ・ホール (A館3階)
 ※明るいレンガ色の建物です。
 〒461-0004 名古屋市東区葵1丁目17-8 TEL052-931-7112

高知例会々場(高知県文学館)

高知県丸ノ内1-1-20

近畿例会々場(茶道資料館)